NO.84

蓬左

HÔSA

近世怪談霜夜星

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

展示室1・2

寄贈40周年・徳川園80周年記念　春季特別展

江戸の粋 ―尾崎久弥コレクション―

今様美人拾二景　愛宕山
しんきそう　渓斎英泉画
名古屋市博物館蔵

腕を組み、伏し目で物思いにふける女。尾崎氏が主著『江戸軟派研究』で掲載した一枚である。
尾崎氏は英泉の妖しく官能的な美人画に注目し、江戸文学に共通する「退廃美」を特に愛した。

尾崎久弥氏は、明治二十三年（一八九〇）名古屋に生まれ、八十一歳で亡くなるまで、終生名古屋を離れることなく、著述、研究活動を行った近世文学の先駆的研究者であるとともに、戯作を中心とした江戸文学の刊本、写本と浮世絵の当代随一のコレクターとしても世に知られた人物です。

書籍や浮世絵など、一万六千点をこえる尾崎氏の収集資料は、没後まもなく昭和四十七年（一九七二）蓬左文庫に寄贈され、「尾崎久弥コレクション」と名付けられました。今年は、同コレクションが寄贈されて四十周年にあたることから、その代表作品をご紹介する展覧会を開催します。

尾崎氏自身、「自分は、浮世絵が専攻ではない、ただ好きというだけである。が、なぶっている(※)江戸期稗史（小説）類とこの浮世絵とは不離の交渉にいる。」と記していますが、江戸の文芸は画文一体、戯作は、文章だけでは成立しません。浮世絵師が、挿絵を画き、華やかな錦絵で合巻の表紙を飾りました。時には絵師が戯作者をやり、戯作者が挿絵を画くこともありました。歌舞伎の人気役者は、浮世絵、戯作のスターであり、中には戯作者を兼ねるものもあらわれました。尾崎氏のコレクションは、浮世絵だけでも、戯作だけでも語れないのです。

この度の展示では、洒落本、人情本、読本、合巻などの蓬左文庫が所蔵する江戸文学の書物と昭和五十八年に名古屋市博物館に移管された浮世絵を一堂に会し、江戸庶民文芸の宝庫「尾崎久弥コレクション」の魅力をご紹介します。

※「なぶる」は名古屋言葉で「手掛けている」「取り扱っている」の意

展示室1・2

戦国の合戦

応仁の乱（一四六七～七七年）以降、国内での勢力争いとして展開していた合戦は、十六世紀の中葉になると一国を超える規模の合戦へと拡大していきました。そして、国内の一領主であった諸勢力は領土を拡大していき、強固な家臣団を組織したいわゆる戦国大名へと成長していったのです。

領土と家臣団の拡大は、さらなる合戦の拡大を招くとともに戦闘方法や武具にも影響を及ぼしました。個人戦から集団戦へと傾向を強め、長槍を駆使した戦いへと変化します。また、新たに伝来した鉄砲を如何に組織的に駆使するかが、合戦の勝敗を分けるようになっていったのです。

その潮流を最も上手く掴んだのが織田信長といえるでしょう。合戦の大規模化は、信長、それに続く豊臣秀吉・徳川家康の天下統一への動きとともに加速していきました。秀吉と家康とが争った小牧・長久手の戦い（一五八四年）や、徳川方と反徳川方で争われた関ヶ原の戦い（一六〇〇年）は、日本全土を二分する合戦として展開されました。豊臣方と徳川方で争われた大坂の陣（一六一四・一五年）は、拡大した戦国の合戦の最期の姿といえます。

本展では、合戦の武具とともに巨大化していく戦国の戦いを紹介します。

長篠合戦図屏風（部分）　江戸時代　18世紀　徳川美術館蔵

天正3年（1575）5月11日に、現在の愛知県新城市設楽原付近で行われた織田信長・徳川家康連合勢（左方）と、武田勝頼勢（右方）の戦いを描く。長篠の戦いは、史上初めて鉄砲を大量かつ組織的に使用した戦いとしても知られている。

※期間中展示替があります。

徳川園80周年特別企画

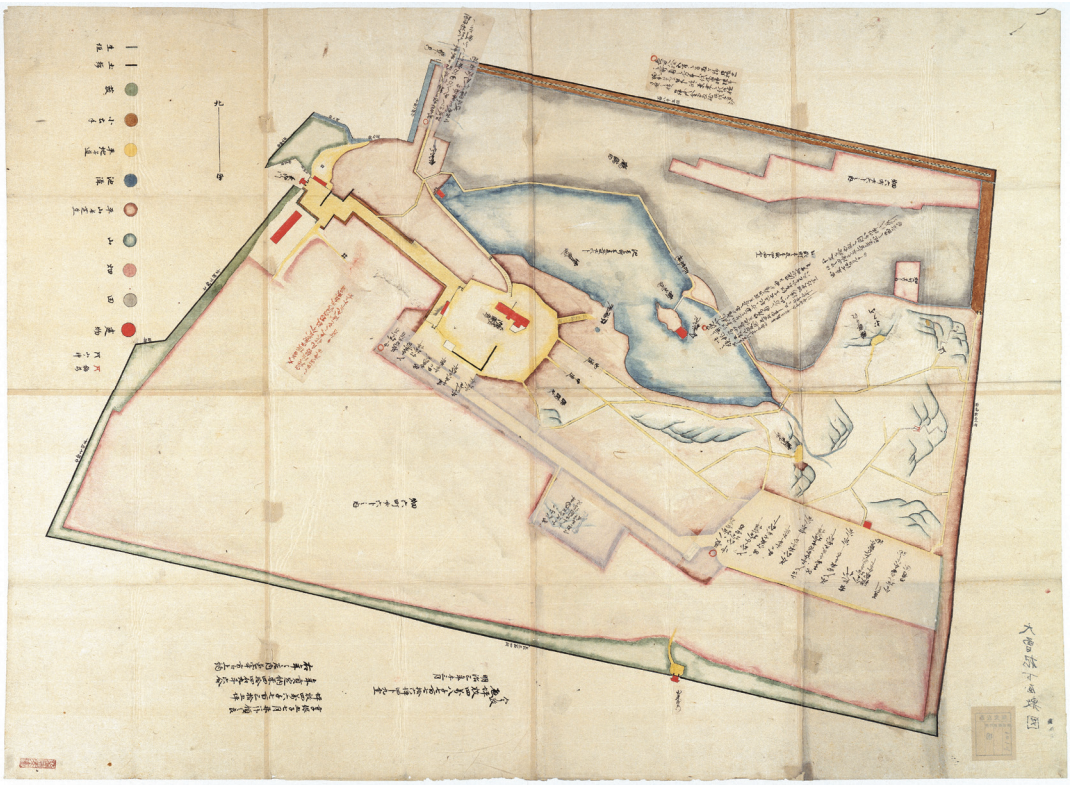
「尾張徳川家大曽根邸と徳川園」

平成二十四年（二〇一二）は徳川園が開園して八十年目の節目にあたります。徳川園は、明治以降に尾張徳川家の名古屋本邸となった大曽根邸の跡地で、敷地内には邸宅ゆかりの門・蔵などが現存しています。

もとは、尾張徳川家二代光友が造営した大曽根御下屋敷があった場所で、光友時代の屋敷は約十三万坪の広大な規模を誇っていました。光友歿後に、屋敷は尾張徳川家の重臣である成瀬家・石河（いしこ）家・渡辺家の屋敷となって分割されましたが、明治二年（一八六九）に再び尾張徳川家の所有となり、明治三十三年に侯爵邸として相応しい規模の邸宅が整備されました。

大正年間以降、大曽根邸の役割は縮小したため、十九代義親は昭和五年（一九三〇）に大曽根邸の敷地の大部分を名古屋市に寄付し、翌六年に正式に名古屋市の所有となりました。名古屋市は土地と建物の整備を行い、翌昭和七年に徳川園を開園して一般公開を行いました。また、義親は尾張徳川家が守り伝えてきた什宝を、新たに設立した財団法人尾張徳川黎明会（現・公益財団法人徳川黎明会）へ寄贈し、昭和十年に徳川美術館を開館させています。名古屋空襲の被害を受け、かつての侯爵邸は焼失しましたが、徳川美術館や、戦後になって尾張徳川家から名古屋市へ譲られた蓬左文庫など、徳川園内には尾張徳川家の伝統を受け継ぐ施設が継承され、平成十六年（二〇〇四）の再整備を経て、現在に到っています。

この展覧会では、御下屋敷伝来道具や屋敷図面・古写真・大曽根邸使用道具などから、これまでほとんど紹介されることがなかった大曽根御下屋敷・尾張徳川家大曽根邸の歴史と由緒を紹介します。

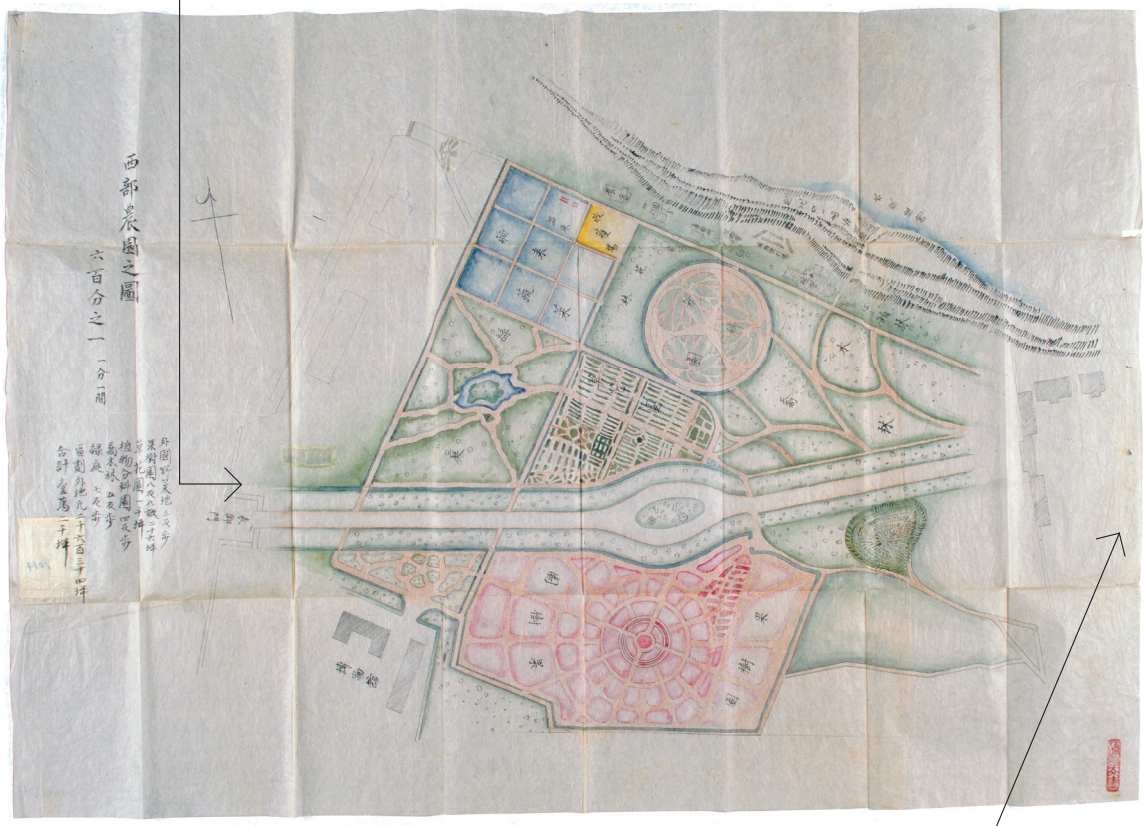


大曽根下屋敷図　明治3年（1870）

成瀬家から尾張徳川家に譲られた頃の図面。敷地東側（図面右）三分の一程度が現在の徳川園の敷地。かつては成瀬家屋敷部分だけでも約４万９千坪の広大な敷地であった。

大曽根邸表御門古写真
明治 41 年(1908)　徳川林政史研究所蔵

大曽根邸の西端(現在の徳川町・山口町境付近)にあった表御門。西側より東側に広がる大曽根邸を写しており、奥の中央左よりに玄関棟の大屋根が見える。尾張徳川家十八代義礼の葬送行列を撮影。



大曽根徳川邸農園図　3枚の内
西部農園之図　明治末年頃

尾張徳川家大曽根邸玄関古写真
明治末年頃　徳川林政史研究所蔵

正門南側の長屋(現存)屋根上より東側を撮影。中央が玄関棟。左側に写る１号土蔵(右)と２号土蔵(左)は、二棟を接続させる形で南側に移設し蓬左文庫旧書庫として利用。再整備後、現・蓬左文庫エントランスホールとして保存・利用している。手前に写る井戸も現存している。

四つの長栄寺

現在の蓬左文庫は平成十六年秋に新築オープンした。その際古い絵図をデジタル画像化するという作業に参加した。それらの絵図のうち名古屋城下図十一枚、尾張図四枚は、絵図中の文字約三万二千件をすべて翻刻した。その作業中、名古屋城下とその周辺には「長栄寺」という寺が次のように四カ所もあることがわかった。文字通り「長く栄える寺」という縁起がいい名前である。

一、宮出町長栄寺（中区栄四丁目　東急ホテル南）日蓮宗　廃寺

二、南寺町長栄寺（中区橘一丁目　橘小学校西）曹洞宗　清須越　現存

三、柳原長栄寺（北区柳原二丁目　地下鉄名城公園駅東）天台宗　現存

尾張藩主斉温の帰依があった豪潮が復興した寺として有名。

四、志水長栄寺（東区白壁二・三丁目　清水口交差点と名鉄清水駅の中間）真言宗　廃寺

ここでは四の志水長栄寺をとりあげたい。この寺は上街道（木曽街道）が城下を出る地点の西側にあり（地図参照）、長久寺の末寺であった。「尾張年中行事絵抄」（『名古屋叢書三編』七巻）の七月十日の項には、

○志水長栄寺、観音参り。（略）九万九千日の参詣を、此夜、後園に遊ばしむ。庭に蓮池あり、折から花の香、そよぐ初秋の風にかほり来、残る暑さの苦悩をまぬがる。

とあるように蓮の花の名所であった。さらに、

相伝ふ、此所は、太古は入海、中世より元禄の頃までは大沼にして、夏・秋の時分は遊船をうめて、花火などを上し由、古老の談話に聞けり。其跡、則今は家並と成て、志水池町の名に遺り。

とあり、付近には元禄のころまで大きな池があったことがわかる。この池はその後、蓮池新田（後に太賀藤新田）として開発された。「蓮池」の名は、現在の蓮池弁財天（北区大杉一丁目）に残っている。また名鉄清水駅周辺の旧町名は深田町であり、かつては湿田であった。深田町の現町名である「清水」も清水が湧いたことによる。名古屋台地と北側の平野との比高は、せいぜい十メートルだが、台地すぐ下は地下水位が高く、水が湧きやすい土地であった。かつては豊かな自然があったのである。

さて、この長栄寺は明治後期ころ廃寺になり、境内は現在ほとんど国道四一号線（空港線）の下になってしまった。現在、寺の面影が残っていないであろうか。寺の入り口付近と思われる場所には、秋葉社（写真、地図のA地点）がある。建物間の狭い空間に鎮座しているが、地元の人によって管理されているようである。江戸時代の長栄寺は、境内に弁財天社・秋葉社などがあったことが記録に残っているので、現在の秋葉社はその系譜を引くものと思われる。神仏分離以前には、寺の境内に神様の祠があることはめずらしいことではなかった。火除けの神である秋葉大権現自体も神仏混合の神である。

実は国道を隔てた場所（地図B地点）にも小堂があり、こちらも長栄寺と何らかの関係があったのではないか、と思っている。

（学芸員　種田祐司）

元禄赤穂事件と尾張藩

「於江戸喧嘩有。毎年春勅使・院使江戸へ有之。高家衆吉良上野介と其外大名両人宛御馳走に懸る事也。今度も上野介と浅野内匠と外に何の某と云者懸る。某は賂を吉良へ遣して首尾を頼む。内匠にも音信可遣由、家老すゝむといへども、賂を以て諛事なしとて少も不遣。吉良は欲深き者故、前々皆音信にて頼むに、今度内匠が仕方不快とて何事に付ても言合せ知らせなく、事々に於て内匠齟齬する事多し。内匠含之。今日於殿中、御老中前にて吉良云様、今度内匠万事不自由ふもとをり不可言、公家衆も不快と被思と云。内匠弥含之座を立。其次の廊下にて、内匠刀を抜て詞を懸て、吉良か烏帽子をかけて頭を切る。吉良駭て急ぎくゞりの様成所をくゞるを後より腰を切といへども共に薄手にてつゝがなし。内匠は則田村右京太夫に御預け、其夜切腹被仰付て云く、勅答未終の間に、殿中にて狼籍の仕方甚不届と思召と云々。吉良に何の御かまひなく喧嘩の沙汰に不被仰出間、吉良も疵養生し、前のごとく可相勤と云々。内匠従兄弟戸田采女頭、内匠弟浅野大学、右両人に内匠召仕等不騒動様に、国元共に可致由被仰付也。」（一部省略）

この一文は朝日文左衛門重章『鸚鵡籠中記』元禄十四年三月十四日の記述である。有名な元禄赤穂事件の発端はこう記録されている。事件はよく知られているように、翌十五年十二月十五日、

「夜、江戸にて浅野内匠家来四十七人、亡主の怨を報ずると称し、吉良上野介首を取り芝泉岳寺へ立退」（同書、同日付）とあるように、有名かつ劇的な結末をむかえる。市井の事件はとりわけ克明に記録にのこし、時に辛辣な感想をツイートする文左衛門だが、この仇討ちにはとくにコメントはない。

この元禄赤穂事件が広く人口に膾炙したのは、時代が下って歌舞伎・浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』として繰り返し上演されたことによる。江戸城内での刃傷は決して特異な事件ではなく、寛政五年（一六二八）に目付豊嶋刑部が若年寄井上主計頭を刺殺、貞享元年（一六八四）には若年寄稲葉石見守が大老堀田筑前守を刺殺するなどの事件がおこっている。この事件は主君の仇討ちを完遂したことが、市井の特別な共感を得たのだろう。

ところで、『鸚鵡籠中記』には別に興味深い記述もある。元禄十五年十二月廿日、仇討ちの五日後の記述に、「内匠家来片岡源五右衛門は熊井十次郎が子也。仍之遠慮す。中根清太夫も又従兄弟故、是は自分遠慮」、翌年二月晦日には、「熊井十次郎遠慮御免。中根清太夫も自分遠慮せしが、今日より罷出。（中略）。赤穂夜討之事に付てなり。」とある。つまり、赤穂遺臣の討入りで、尾張藩士の熊井氏や中根氏が約二ケ月「遠慮（自己謹慎）」したということである。赤穂と尾張の接点はどこにあるのだろう。

あまり知られていないのだが、浅野家と尾張藩は関わりが深い。尾張藩初代藩主義直の正妻、春姫（高原院）は、浅野長政の長男で初代紀州藩主浅野幸長の娘で、その輿入れに際し媵臣として数家が尾張藩に召し抱えられた。『士林泝洄』巻第七十四庚之部二に「媵臣家」として、大津、熊井などの五家が挙げられている。浅野幸長は嗣子がなく、弟の長晟が跡を嗣ぎ、元和五年に芸州広島藩に転封となる。一方、長政の三男長重の子長直は播州赤穂に転封され赤穂藩初代藩主となる。その長直の孫が元禄事件の長矩にあたるのだ。つまり、播州浅野家は芸州浅野家の傍流であり、尾張藩は春姫を通じて芸州浅野本家と縁戚なのである。

話を戻すと、片岡源五右衛門は寛文七（一六六七）年、三百石取の尾張藩士熊井十次郎重次の子として誕生。やがて縁戚の赤穂藩士片岡六左衛門の養子となり、家督相続後は浅野長矩の寵臣として三百十石を得ていた。討入りの後、実父である熊井重次の謹慎は当然であり、媵臣の熊井氏が赤穂の片岡家と関わりがあることは何の不思議もないのだ。

また『金鱗九十九塵』巻第五十八には「御添地　△名家」として、「不破氏　当家の先祖、元ハ播州赤穂の城主浅野内匠頭長矩に仕へて、家の騒動の刻義臣の列に入たる不破数右衛門正種と号、所謂四拾七騎の一人にして、世挙て知る所也。其後正種の子、故在て当国へ来り仕へて、今子孫御添地に居する事連綿たり。（後略）」とある。不破数右衛門の子大五郎は幼少で出家し縁座を逃れ、のち還俗して尾張藩に召し抱えられたことが知られているが、その子孫は御添地の一角に居住していた事も幕末の城下図から確認できる。

（調査研究員　松村冬樹）

表紙は、「源氏物語」を翻案した合巻『偽紫田舎源氏』でのちに大ベストセラー作家となった柳亭種彦の読本第一作『近世怪談霜夜星』に葛飾北斎が画いた挿絵の一場面である。

シャレや流行語を多用し、荒唐無稽な筋立てで世相や事件をテーマに大流行した「黄表紙」や、遊里を舞台に、そこで遊ぶ通人たちを主人公にした「洒落本」が幕府の取り締まり強化によって衰退し、ストーリー性を重視した長編ものの流行によって、合巻とともに江戸後期・幕末の大衆文学を代表したのが読本である。

合巻が、挿絵と文章が渾然一体となった長編絵本であるのに対し、読本は時代を超えた大ベストセラー『南総里見八犬伝』に代表される封建道徳を軸に、複雑で壮大なストーリーが、和漢混淆文によって語られる挿絵入り長編小説である。

かつての恋人同士お花と伊兵衛は、伊兵衛の妻お沢をだまして自殺に追いやり、めでたく所帯を持つが、お沢の怨霊が二人を追いつめる。この筋立ては、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』と同じ元禄時代に起きた実際の事件を素材としている。

挿絵を画いた北斎は、文化年間（一八〇四～一八）をピークとする読本の人気を支えたとされる。その躍動感に満ちた独自の幻想的表現や想像力は、読本の世界で遺憾なく発揮された。

とくに妖怪画の描写は圧巻である。表紙の場面は、襲いかかるお沢の怨霊に立ち向かう伊兵衛、一方、怨霊が見えず伊兵衛を止めようとするお花という怪奇的な場面が、北斎独自の構図や空間表現によって描かれ、読者は、物語の世界に引き込まれる。

本書は、また丹表紙に鳥居清経風の題箋が残る初版本である。挿絵には、重ね刷りによる墨の濃淡だけで表現された鬼気迫る怨霊の世界が鮮やかに残る。尾崎コレクションの名品といえる逸品である。

近世怪談霜夜星　表紙
文化5年（1808）刊

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

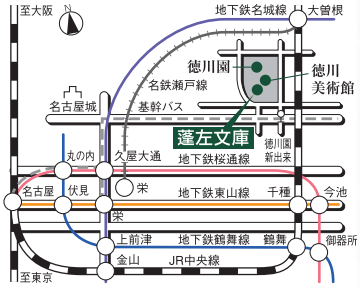
【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）8月13日(月)は展示室のみ臨時開館します。
12月中旬～1月3日　※催事により変更することがあります。

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）8月10日(金)～12日(日)午後7時まで延長開館（入室は午後6時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第84号　☆平成24年3月31日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

徳川園80周年